

宇部市文化振興まちづくり審議会 第4回会議概要

日時：平成28年(2016年)10月13日(木) 15:00～16:40

場所：市役所2階 第3会議室

出席者：委員9人(欠席1人)

事務局：片岡総合政策部長、庄賀総合政策部次長

青山文化・スポーツ振興課長、荒武文化・スポーツ振興課長補佐

酒井文化振興係長

議事

(1) 次期ビジョン骨子案の検討について

次期ビジョン骨子案について概要を事務局より説明。

(会長) 市民アンケートの調査結果について、「1年以内に文化芸術活動をしているかどうか」、「文化芸術の鑑賞をしたかどうか」という設問があるが、一般的に文化活動の定義は難しいところがある。

どこまでを文化活動というのか・・・、渡辺翁記念会館でコンサートを聴くというのは文化活動に該当すると一般的に考えられる。子どもの絵の展示を見に学校へ行くとか、買い物のついでに、生け花展を見てきたなどのケースもある。

アンケートに答えた人がどのような意識であったかも気になるところである。

以前からお話している「限界芸術」という考えでは、いろいろなモノ・事柄が「芸術」という考えだ。

北川フラムは、生活のすべてが芸術という考え方をしている。よって、「普段、里山に住んでいる人が食べている物もアートである」と言っている。

つまり、文化は日常的に生活の中に入っているということだ。

「文化芸術を鑑賞していない」人は、28%となっているが、回答した方は、芸術を従来のカテゴリー、つまり少し高尚なものと考えている可能性はある。

その方たちも、文化芸術に関することを何もしていないのかという恐らくそんなことはない。

メディアが発達しているので、実際にコンサートに行かなくても、自宅でDVDを観ることは立派な鑑賞活動と言えるだろう。

(委員) テーマA「まちじゅうアートフェスタ」の今後の課題欄で、「生活や空間そのものをアートとする新たな展開も必要」との表現は、どのような意味か、先ほど会長が話されたようなことか。

(事務局) 例えば、家に飾ってある花・絵などもアートとして認識する。買い物や会議の場など、外出先でも日常的に花や絵があるなど、まちの中に、普通にアートがあるようなイメージを想定している。

(会長) 平たく言えば、それは「文化的な生活」ということになるだろう。買い物のついでに飾ってある絵をみて、それに誘発されて家にも花を生けてみる。そのような行為や考えが大事。
文化が日常的に浸透していくということだ。

(委員) 各重点アクションには、それぞれ目標指標と目標値があるが、それぞれの部署から示されたものか

(事務局) 各部署から示されたものと、既存の他の計画における目標指標等との整合性を図ったものがある。

(委員) テーマA「まちじゅうアートフェスタ」の四つの重点アクションの中には、取組の目標値が、隔年のものと毎年のものがあるが、これもそのような事情か。

(事務局) ご指摘のとおりである。

(委員) UBEビエンナーレも前年に審査や応募作品展（模型展）を開催している。隔年ではなく、毎年度に目標値を設定したらどうか。

先日、市民大学で、湖水ホールの応募作品展を見学したが、なかなか面白いし、人も多く来ている。

(会長) 確かに、応募作品展は興味深い。

ただし、目標指標に無理に入れなくても、データをとっておけば良いだろう。

(事務局) 応募作品展については、取組内容の中に、表現するよう考えてみたい。

(委員) ずいぶん前から気になっていたが、彫刻設置に関するグランドデザインはあるのか。

(事務局) 彫刻設置に関してのグランドデザインはなく、設置する際は、現地等を確認し、設置委員会で作品を選ぶなどして決めている。

(会長) 応募作品展は私も観た。面白いものが多いが、応募した彫刻作家は作品をどこに置くかは考えないで制作する。

それが、市内各所に設置されているのだが、50年くらいのスパンでの、設置等に関するグランドデザインを考える時期に来ているのかなとも思っている。

(委員) 彫刻から少しずれるかもしれないが、最終的な宇部のまちづくり着地点などはどこにあるのかと思っていた。

20数年前に宇部新川駅から平和通りが整備されて、街路がきれいになったが人が歩いていない。

また、しばらくして常盤通りも整備されたが、相変わらず人通りが少ない。

彫刻や街路樹・花壇等も整備され、文化的な街路を目指してつくったのだろう。

(会長) 日本が高度成長を迎えている時期には、現在の地方都市の姿、中心市街地の衰退など予測できなかったと思う。

中心部の街路整備が計画されたのも、まだ街が賑やかで、もっと中心部に人が集まり、街路を歩いてもらいたいと考えたのだろう。

(委員) 1980年代に近隣市に郊外型の大型商業施設が立地した際、宇部市の事業者は、市内の立地に反対・消極的だった。

宇部市街地に立地したら今のような衰退はなかったのではないか。

(副会長) 経済界にもいろいろ考え方があ

る。大型商業施設があると、潤う業者もあればそうでないところもある。

いろいろ、問題はあるが、今できるところで考えなくてはならないと思う。

山口市にしても、市役所周辺は、日本の道100選に選ばれた「パークロード」があり、市外の方から見ると良さそうに見えるが、これも市民すべてが評価しているわけではない。

UBEビエンナーレについては、現在私の勤務するホテルのロビーに、模型を置いている。また、彫刻の横には、顔はめパネルを置いて、彫刻をPRしている。

お客様には好評で、二組に一組は、実際にこの度の模型展に行かれています。

まちそのもののランドデザインについては、方向性がいろいろある。市、商工会議所、市の部局の中でも考えの違いはあろうし恐らく、どこの市町村でも同じだと思う。

必要なのは、今地道にやっている文化活動を支援し、文化活動を浸透させていくことではないか。

文化に対する市を挙げての取組は、宇部市は、評価できる部分は多い。

(委員) 市民大学文化学部の講座で、「以前は彫刻への批判も多くあったが、今は市民の理解が徐々に広がってきている」という話があった。

(会長) 昨年「まちじゅうアートフェスタ」を実施したが、このような取り組みが実現するという事は、県内でも宇部が文化活動に積極的であると言える。

まちじゅうアートフェスタは、「にぎわい」を意識して実施したが、市が税金をつかって文化事業を行う以上、経済的な効果も必要だろう。

文化事業は、教育的な意味があるのと同時に、文化に触発されて起業があったり、特産品が注目されたり、活動が評価されて色々な人が訪れるようになることが期待される。

経済的な効果がなくてはならないだろう。

アートによるまちづくりは、現在、全国で、様々な地域で行っている。

まちの活性化とは、まちが元気になって税収入が増え、市民の生活が豊かになることが目的だと考えている。

言葉は悪いが、その手段として文化があると考えても良い。

同時に、文化が日常的に浸透することにより、「教養ある市民」が増えて、ひいては良い地域や国になってくれると良い。

そのような意味で、「まちじゅうアートフェスタ」を行ってきた。彫刻だけではなくて、各種様々な方向での拡がりに力を入れた。

もちろん彫刻の方は50年以上開催しているし、これからも続けていけば良い。

彫刻は、18世紀くらいまで、建物の一部・庭の一部であったが、だんだん「彫刻」に純粹化してきた。

それを今、再び街に戻すというので、難しい面はある。

ニューヨークやソウルなどは建物の敷地の一部に、「芸術」関係の割り当てを行わなければならない決まりがある。

ソウルなどは、建物や現地などに合った彫刻を制作するようになって、それにふさわしい景観を形成している例がある。

宇部は、作品が最初にあって、それから設置場所を探すので、そのようにはいかないだろう。

(委員) 小さいころは、まちなかの彫刻は遊具のひとつとしか考えてこなかった。

28歳で、初めて彫刻について説明を受け、作者の思いなどに興味を持った。

UBEビエンナーレは、長年に渡り開催しているが、実施することでのプラスアルファとしては何があるのか。

企業なら投資した利益を回収しなければならない。行政の場合は市民の文化的教養が高まるということが成果につながるのだろうか。

「まちじゅうアートフェスタ」として、市域全域に拡げていくと、どのようなまちにしたいのか、焦点がぼける気がする。

アートでまちづくりをするのは、行政も専門的なノウハウもないので運営側も模索中とは思いますが、特徴が必要と思う。

(委員) 文化事業は、経済的などころも重要である。

イベント等に参加される人から、収入を得ることも大事、そのような方策を考える必要がある。

(会長) 例えば、応募作品展の模型を売るといったことが可能ならば、面白いかもしれないが、作家との関係で難しいだろう。

今年の「まちじゅうアートフェスタ」は、短期間にエンジンをかけて、バタバタと実施した。じっくり考えて、結局何もしないよりは良いと思った。

どれくらい人が集まるのかわからなかったが、予想以上に多くの人が来られた。

旧船木鉄道の路線跡や「トンネル」など、こんな場所があるのかと、皆関心を持っただろう。

あれも立派なオブジェで、イベントのおかげで初めて知った人も多い。

「食を文化ととらえるのか」などと言う人もいるが、まちおこしと考えれば良い。

ただ、そこには、宇部ならではの特徴を持たせることが必要。

(委員) そこが、グランドデザインを持つということになるのだろう。

このビジョンが完成した時には、市民には、一枚でこのビジョンの神髄というか市民に訴えたいものを、わかりやすく表現して、少しでも理解してもらうことが必要だろう。

「こんな文化的な市民になりたい」と思うような、ビジョンの目指すところがわかるよう、この三つのテーマもしっかり認識できるように作っていくことが必要。

(委員) テーマC「子どもへの文化体験の取組」でいうと、UBEビエンナーレのことを子どもの頃に知る機会があれば良かった。学生時代にもっと文化的な教養を深めておくべきと思う。

(委員) 教育の考え方では、無駄と思われるようなものでもいいので、多くの体験をすることで良いものが出てくるとされている。

はじめから、良いものだけを選んで学ぶと、それに乗れる器用な人はいいが取り残される子もいる。

市内の全部の小学校で赤間硯をつかった授業をした。1回ではあるが、子どもたちに何かが残れば良いと思う。

彫刻教育も全小学校でしているが、今は興味がなくても将来的に何か残るではないか。

(委員) 学校教育でいろいろな体験をしてもらいたい。全員でなくても出来るところからでよい。

(会長) 「時熟」という言葉がある。

最近、子どもたちに、少しでも知識などを植え付けてみようという考え方が復活してきた。

嫌いでも、知ってもらい、体験してもらい。

基礎的な知識がないと、何かに触れても反応できない。

小中学生の時は体験を増やして、大人になってから、「これは昔習ったことがあるな」と少しでも思い出すことで「生涯教育」につながっていく。

そういう意味で赤間硯の授業も1回でもやってみると、将来硯に触れて感じる可能性がある。

教育は長いスパンで考えていくことが必要。

(委員) 市内に学生が集まれる場所があれば良い。そうでもしないと、今の学生は広島や福岡にすぐに行ってしまう。

藤山校区では、「藤山ゆめ音楽祭」があり、子どもは幼稚園児から大学生まで参加している。

学生も、地域の行事に参加する中で、地域に関心を持つこともあると思う。

藤山校区だけでなく、他の校区でもこのような取り組みがあると、学生や若い人が地域に興味を持ち、文化活動や地域活動にも良い影響を与えられると思う。

(会長) 留学生の奨学金の面接試験をしたときに、日本に来た理由として、「日本人はやさしい」というのがあった。

日本人が人に「やさしい」というのは外国人にも伝わっているのだろう。ビジョンの基本目標を「文化の薫るやさしいまち」にしても良いかもしれない。

(委員) 「文化の薫るまち」になれば、それは「やさしいまち」であることと同じだと思う。

策定の趣旨に「文化芸術活動を通じて享受する楽しさや感動は、人生の喜び、生きる糧となるもので、日々の暮らしに潤いをもたらす、心豊かな市民生活や活力ある社会の基礎ともいえるものです」とあるが、ここが目指すところであり、わかりやすくいうと、それぞれの人が心豊かになると「やさしくもなる」ということだと思う。

このビジョンが、「市民にいかに伝わるか」ということを大事にしないと「いろいろイベントをしました」、「人もそこそこ集まりました」、「でも何も後には残らない」ということになる。

ビジョンの目指すものをちゃんと市民に伝えることが大切である。

(2) その他

次回、第5回会議については、11月17日(木)15時から開催することとした。